岩崎純一歌集		『新純星余情和歌集』＞2010年の部				
歌集名読み		しんじゆんせいよせいわかしふ				
作者		岩崎純一				
通釈・語釈		園井長光、戸井留子、蝶子、沙月式部、岩崎純一（自釈）				
作者サイト		http://iwasakijunichi.net/				
和歌ページトップ		http://iwasakijunichi.net/waka/				
詠進年月日	題	2010年の歌会・歌合	通釈	語釈	他歌人欄	
主催： 余情会	歌数：40首 歌人数：4名 自歌数：11首	『平成新詠天徳内裏歌合』（へいせいしんえいてんとくだいりうたあはせ）			評	派生歌など
2010/1/7　出題 2010/2/5　判		「皆その用ふる所は金銀沈香等の類にあらざるなし」の記録によって和歌史上最も煌びやかな歌合と言われる『天徳内裏歌合』（960）にならい詠むこととされた。衣装のみ、春の桜重ね（左方）と夏の柳重ね（右方）が再現された。金銀の州浜は和紙により模された。 原主催・出題者：村上天皇 原判者：藤原実頼 出題者：長満たき・伊田小春・楽満小花 衆議判				
2010/1/10	霞	さびしさは秋の枕に同じかな春や霞の夕暮れの果て	その寂しさは、枕に寝て感じる秋の季節に同じものだ。果てなく霞んだ春の夕暮れは。			
2010/1/12	鶯	うぐひすは心の声に聞こえつつまだ梅が枝に影もとまらず	鳴き声は我が心にのみ聞こえて、まだ現実の梅の枝に鶯はとまらず、その姿は目にもとまらない。	◇掛詞 「（枝に）とまらず×（目に）とまらず」		
2010/1/12	鶯	声はなほ我がふみまよふ霜ぞなく今日うぐひすの春と思へど	今なお鳴っている音と言えば、自分が踏み歩いている霜が砕ける音のみだ。今日から鶯の鳴く春だと思ったのに。			
2010/1/15	柳	柳原いと細き夜のしだれ糸葉を縫ふ雨の音（おと）ぞ重なる	しだれ柳の野原。実に細い柳の葉に、夜のしだれ糸である雨の音が重なり、雨が葉どうしを重ねて縫うようだ。	◇掛詞 「いと×糸」 ◇縁語 「柳、しだれ、葉」「細き、糸、縫ふ」		
2010/1/15	桜	白妙のたつけしきより桜花霞の衣（きぬ）の裏の山裾	春の白い霞が立ったすぐそばから、その霞という着物の裏側に隠れた、山のふもとの桜。	◇掛詞 「立つ×裁つ」 ◇縁語 「白妙、裁つ、衣、裏、裾」「立つ、霞、山」 ◇枕詞 「白妙の→霞、衣」		
2010/1/17	款冬	春風のひとへに過ぐるかをりよりやへに花咲く山吹の色	春風がひたすら薄く過ぎてゆく香りよりもっと、何重にも濃く見える山吹の黄色。	◇掛詞 「偏に×一重に」 ◇対句 「一重に、過ぐる、かをり//八重に、咲く、いろ」		
2010/1/18	藤	紫の色より暗く空更けて夜にも見ゆる屋戸（やど）の藤波	紫の色よりも暗く空は更けたはずが、その黒き夜にも見えるのは、庭先に植えてある紫の藤の花。	◇参照 「恋しけば形見にせむと我が屋戸に植ゑし藤波今咲きにけり」（山部赤人『万葉』）		
2010/1/18	卯花	桜色の弥生の月のなごりかは白みは果てず咲ける卯の花	桜の咲き誇った弥生三月のなごりか。真っ白にはなり果てず、桜色を帯びて咲く卯の花。	◇「弥生」→「卯月」、「桜」→「卯の花」		
2010/1/23	郭公	風薫りあつさは遠き静けさに夏を定むる山ほととぎす	夏の風が薫っても暑さはまだ遠い静けさのようであったが、いよいよそこに夏を決定付ける、山のほととぎすの一声。			
2010/1/23	夏草	刈るからに道の行く手にあらはれてかき分けがたく繁る夏草	刈るたびに道の行く手に現れては、かき分けて進むのがうっとうしく繁る夏草。			
2010/1/26	恋	桜花しだれ柳を重ねても袖の契りは次の折の名	春の桜や夏のしだれ柳を重ね重ね眺め、それらをあしらった着物を重ね着しても、袖の約束は次の季節の名前でございます。つまり、あなたの心は私に「秋（飽き）」が来たのでしょうね。	◇掛詞 「重ね×襲（かさね）」「次の折の名（秋）×（飽き）」 ◇縁語 「重ね、襲、袖、折り」		
主催： 余情会	歌数：10首 歌人数：3名 自歌数：2首	『平城遷都千三百年　余情会歌合』（へいじやうせんとせんさんびやくねん　よじやうくわいうたあはせ）			評	派生歌など
2010/4/24　出題 2010/11/7　判		平城遷都1300年祭祀の一環として、記念の和歌を詠むこととされた。 出題者：長満たき 判者：衆議判				
2010/4/24	平城遷都千三百年	あをによし奈良の東雲（しののめ）ほの見えて西日に落つるいにしへの花	明け方、東の空が、美しかったあの奈良の明け方の空をほのかに思い出させる中、すぐに一日は経ち、いにしえの奈良の思い出は、散る花のように、西日と共に記憶の底に落ちてゆく。	◇枕詞 「あをによし→奈良」 ◇対句 「東雲//西日」		◆あをによし都の桜また見えず今は心の中空の花（長満たき）
2010/4/24	平城遷都千三百年	やほよろづ奈良の葉柏（はがしは）神山（かみやま）の守（も）るいにしへに漏るは涙ぞ	かつて都のあった奈良では、今や、山々の多くの葉とそれらに宿る八百万の神々だけが、昔の姿を保っている。それを見るにつけ、漏れるものは我が涙である。	◇掛詞 「奈良×楢」「もる（守る×漏る）」 ◇参照 「神山の楢の葉柏」（『後拾		◆奈良の寺仏の光なつかしく流るる水の上方の影（長満たき）

主催: 余情会	歌数:9首 歌人数:3名 自歌数:3首	**『湊川恋歌合』(みなとがはこひうたあはせ)**			評	派生歌など
2010/5/15 出題 2010/5/31 判		松竹梅に寄せて恋を詠むこととされた。 出題者:長屋せら 判者:青柳香織				
2010/5/18	寄松恋	白雪に待たじの積もりかこちても心は春を松風の声	松の木の白雪の積もり具合を見て「あなたを待たない」つもりでいても、心では晴れる春が来るのを待つと分かっているような風の音がする。	◇掛詞 「積もり×つもり」「待つ×松」		
2010/5/20	寄竹恋	日は落ちぬ人の契りも呉竹の一人臥(ふ)し寝(ね)の夜々の下折れ	日は落ち、恋人の約束も暮れました。私は独りで寝ます。呉竹の節々が折れるように。	◇掛詞 「暮れ×呉」「臥し×節」「夜々×節々」 ◇縁語 「日、落つ、暮る」「呉竹、ふし、よよ、折る」 ◇枕詞 「呉竹の→夜」		
2010/5/22	寄梅恋	年暮れて我が身ばかりは梅が香の梢のよそに枯れし面影	一年が暮れて、私の身ばかりが憂鬱で、香りを放つ目の前の梅の枝と反対に、離れていった恋人の面影。	◇掛詞 「憂(う)し×梅」「枯る×離る」		
主催: 岩崎純一	歌数:13首 歌人数:1名 自歌数:13首	**『戦歌』(いくさうた)**			評	派生歌など
2010		先の大戦に関する和歌を詠んだ。 自撰				
2010/8/14	戦	同じ月出づる空行く人思ひ袖越す波の色迷ふ彩	同じ一つの月が出る空を戦闘機で行く夫を思って流す波のような涙は、袖に迷彩服のような模様を描く。			
2010/8/14	戦	生きて恋死なば我が身の慕ひしは数ならぬとや思ひなすべき	あなたが生きて帰ってきたら、恋だったことにします。死んでしまったら、私が慕ってきたことは、取るに足りないことだったと思い込むべきでしょうか。			
2010/8/14	戦	我が眼やよ許さじよ鳴く鹿の声隠す火の音に覚めけり	私のまなこは、ええ、きっと許さないわ。鳴く鹿の声を隠し、私を呼んでくれる恋人の声を隠す戦火の音に、覚めたまなこですか			
2010/8/14	戦	思ふどちあらば逢ふ世も叶はぬと白雲のよその赤き玉章(たまづさ)	思い合っているどうし、生きていれば逢うこともあるでしょうに、そんなこの世の夢も叶わないとばかりに、白雲をよそに赤紙が届いた。	◇「赤紙」 ◇参照 「いかにしてしばし忘れん命だにあらば逢ふ夜のありもこそすれ」(『拾遺』『八代集秀逸』)		
2010/8/14	戦	年経ても橘の頃に残る雲ありし女子(をなご)の形見とも見よ	私があの世に行ってから年月が経っても、橘の花が咲く頃に空に残る雲を、生きていた私という女の形見だと思って見て下さ			
2010/8/14	戦	益荒男や松の千歳(ちとせ)は時わかず夜半の浮寝(うきね)も戦(いくさ)なりけり	男というものは、松の命が四季を問わず長いように、夜に悩んで寝ている間もなく、明けても暮れても戦争である。			
2010/8/14	戦	飛ぶ蛍我にも分けよ広島が朝に光りて燃えぬ身のすべ	飛んでいる蛍よ、私にも分け給えよ。広島の朝に、光るだけ光って、しかし燃えはしない、身の術を。	◇参照 「飛ぶ蛍まことの恋にあらねども光ゆゆしき夕闇の空」(馬内侍)		
2010/8/14	戦	山鳥の尾のしだり尾の長崎のひとり寝し床の我が身忘るな	あなたが帰って来るようにと、山鳥のしだり尾のように長い日々を待って、長崎の家の床で独り寝てきた私を忘れないで下さい。	◇枕詞 「山鳥の→尾、ひとり寝」 ◇序詞 「～長崎の」 ◇本歌取 「あしひきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかも寝む」(人麻呂『万葉』『拾遺』)		
2010/8/14	戦	思ひきや緑に増して白雲の茂る葉月の朝戸出の空	どうして思ったことでしょうか。朝、戸外に出ると、緑色に増して白い茸雲が茂っている、八月の空を。	◇縁語 「緑、茂る、葉」 ◇対句 「緑、葉//白雲」		
2010/8/14	戦	月ならぬ昔の光夢に見き覚めても空のまぼろしの影	月ではなく、昔の原爆の光を夢に見た。目覚めても、空に幻ながら光が見える気がする。			
2010/8/14	戦	草の原いにしへ人も知ると言へど残さずに見よこの焼け野原	かの『源氏物語』にもある秋の「草の原」を古人とて知っていると言っても、夏の終戦の焼け野原をくまなく見てみよ。	◇参照 「見し秋を何に残さむ草の原一つにかはる野辺の景色に」(良経)		
2010/8/14	戦	悲しみはかをるばかりを行方とて消ゆるならひの同じ花かな	散って消える運命にあることは人の命と同じで、香ってゆく方角だけを悲しき行方として追うことができる、桜であることだ。	◇本歌取 「花の香はかをるばかりを行方とて風よりつらき夕闇の空」(定家)		
2010/8/14	戦	ただ死ぬと知るにつけても夢に見む四方(よも)の茜のよその契りを	ただ死ぬしかないと知るにつけても、夢に見よう、四方を囲む戦火をものともしない、我々の平和の約束を。			
主催: 余情会	歌数:8首 歌人数:4名 自歌数:2首	**『椎名町歌合』(しひなまちうたあはせ)**				

					評	派生歌など
2010/8/22	即詠	述懐を詠むこととされた。 出題者:番園未奈 判者:武田あさゑ　長屋せら				
2010/8/22	述懐	椎名町今が都のはづれだに騒がしき世は陰も頼まれず	椎名町のような、今の都のはずれでさえ騒々しい世である。息つく日陰もない。	◇椎名町:旧豊島区椎名町。駅名のみ残る。		
2010/8/22	述懐	今ぞなほ世を浮雲と思へかしありとしあるは人の裏切り	今の世こそ浮雲のような憂き世と思っておくのがよい。あらん限りのものとは、人の裏切りである。	◇掛詞 「浮×憂き」		
主催: 余情会	歌数:66首 歌人数:3名 自歌数:22首	『平成新撰和歌六帖』(へいせいしんせんわかろくでふ)			評	派生歌など
2010/10/1 2011/1/31	出題 判	『古今和歌六帖』(10世紀後半)及び『新撰和歌六帖』(1243)にならい詠むこととされた。 出題者:長満たき　青柳香織 判者:衆議判				
2010/10/1	第一:歳時	春秋にまさるけしきやあらなむよ我が身ののちに五つ目の折	四季折々の美に勝る景色があってほしいものだ。私の死後の五つ目の季節に。			
2010/10/3	第一:天	海原(うなばら)も星の林に光りつつ舟路の闇にきらめきの果て	夜空も海原も、林のような星々に光っている。舟は星々に隠れてゆく月のようだ。そんな舟が行き着く果ての海の闇の世界にも、きらめきがあるようだ。	◇本歌取 「月の船星の林に漕ぎ隠る見ゆ」(『万葉』)		
2010/10/8	第二:山	み吉野をさくもうつせる飛鳥山低き雲にも峰は隠れで	み吉野に咲く桜を映し、それを狭く移したような飛鳥山。低い雲にも峰が隠れないほどの低さだが。	◇掛詞 「咲く×狭く」「移す×映す」 ◇飛鳥山:東京都北区		
2010/10/8	第二:田	年返り寝ねし門田の雪とけて歩むなはてに春風ぞ吹く	年が改まり、眠っていた門田の雪は解けて、歩いてゆく畦道に春風が吹く。	◇掛詞 「寝ね×稲」 ◇縁語 「稲、門田、畷」		
2010/10/8	第二:野	いにしへにただおとなふは風ばかりひがしの果ての武蔵野の原	いにしえには、訪れるのは人ではなく、ただ風ばかりであった、東の果ての武蔵野の原。			
2010/10/8	第二:都	あさましや夜なき今日はひがしより夕日も見えず明くるしののめ	嘆かわしいものである。夜の闇もない今日の東の京は、昨日の夕日も見えないうちに、東から明けてくる東雲の空である。	◇掛詞 「今日×京」		
2010/10/8	第二:田舎	宵闇のひなの長道(ながぢ)に雨落ちて歩み明石の浦の潮風	宵闇に雨が降る中、田舎の海辺の長い道を歩き明かし、辿り着いた明石の浦には潮風が吹いている。	◇掛詞 「明かし×明石」 ◇歌枕 「明石の浦」 ◇本歌取 「天離るひなの長道ゆ恋ひ来れば明石の門より大和島見ゆ」(『万葉』)		
2010/10/8	第二:宅	ひとりすむ家にある身は捨つべきや閨(ねや)耐えがたく人ぞ恋しき	独りで家に住んでいる私の身は、死んで神仏に捧げてしまうべきでしょうか。独りでいる寝室がもはや耐えがたいほど人が恋し	◇参照 「しきたへの枕ながるる床の上にせきとめがたく人ぞ恋しき」(定		
2010/10/8	第二:人	天つ空人の世の中あくがれて我が身蛍に寄する乙女子(をとめご)	天空のように手の届かない他人の男女の仲に憧れて、自らの身から出てさまよう魂を天に昇る蛍に喩える、和泉式部のような若い女。	◇参照 「物思へば沢の蛍も我が身よりあくがれいづる魂かとぞ見る」(和泉式部)		
2010/10/8	第二:仏事	世人よりまことの道を知りぬらし寺に踏み入るたけき猪	人間よりも真の仏道を知っているようだ、寺に遠慮なく踏み入る勇敢な猪は。			
2010/10/12	第三:水	花落ちて河風薫る水の面(も)の弁々(よよ)は流れて光る夏の日	花が落ち、風が薫り始め、河の水面の花びらが流れては日光に照らされる夏の日。			
2010/10/23	第四:恋	秋の闇に出でし光をうつすらむ涙に空も袖も見えねど	私の袖は、秋の闇の空に出た月の光を映しているでしょう。涙で空も袖も見えないけれど。			
2010/10/23	第四:祝	あらたまの祝ふばかりを形にて今は二日(ふつか)と見ぬ朝日影	近頃の我が国は、元旦と新年を祝うのは形ばかりで、元日が終われば、二日と見ることはない朝日の光の美よ。	◇枕詞 「あらたまの→(年)、日」		
2010/10/23	第四:別	忘るなよふたたび逢はぬ別れ霜春の幾夜もとけし語らひ	忘れないで下さい。かつてうちとけて語らい合った多くの春の夜を。八十八夜の頃の霜の中、再び逢うことはないと別れる私たちをよそに、また春がやって来ます。	◇掛詞 「(霜が)解く×(二人がうち)解く」		
2010/11/4	第五:雑思	秋の袖さしてなき夜の床更けてそれとは知らず濡るる月影	特に何という悩みもなく秋の寝床に夜が更けてゆくものと強がっておりましたが、自分でも気づかないうちに、袖に映る月影は涙に濡れているのでした。	◇本歌取 「思ふことさしてそれとはなきものを秋の夕べを心にぞ問ふ」(宮内卿)		
2010/11/4	第五:服飾	玉くしげ心の奥にあかで待つときし黒髪とけぬ下紐(したひも)	心の奥では、満ち足りずにお待ちしております。黒髪なら、櫛箱を開けて一人で梳きましたが、衣の紐はまだ解けずに。	◇枕詞 「玉くしげ→奥、あか」 ◇縁語 「玉櫛笥、開く、梳く、黒髪」		
2010/11/4	第五:色	色々に染み集ひたる身頃(みごろ)かな花野のうちをなべて巡れば	様々な色が染まり集まっている着物の身頃が見頃ですよ、秋の花野の中を巡り回ったから。	◇掛詞 「身頃×見頃」		
2010/11/4	第五:錦綾	くれはとりにほひし綾(あや)も暮れ果てて夜の錦はそばの面影	美しい織物の匂うような色どりも、夜の暮れ果てた闇の中では、そばにあるはずが、甲斐のない面影です。	◇枕詞 「くれはとり→綾」 ◇慣用 「夜の錦」		

2010/11/20	第六：草	縁（ゆかり）てふ紫だにも露あらず霜と結びし深草の野辺	人との縁だと古歌に言い伝えのある紫草さえ少しもなく、露に代わって霜ばかりが結んだ深草の里の野辺。	◇慣用 「紫の縁」 ◇掛詞 「露×つゆ（少しも）」「（縁）結ぶ×（霜）結ぶ」 ◇縁語 「縁、結ぶ、深」「露、霜、結ぶ、深草、野辺」 ◇歌枕 「深草」		
2010/11/20	第六：虫	さむしろに休む霜夜の機織（はたお）り女（め）寂しきそばにきりぎりす鳴く	霜が降りるようになった初冬の夜、機織りをやめて冷たい莚に休む織姫。寂しい思いのそばで、きりぎりすが鳴き、織姫も泣く。	◇本歌取 「きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに衣片敷きひとりかも寝む」（良経）	◆「きりぎりす」を、古歌に慣例の「こおろぎ」ではなく、今の「きりぎりす」の意として詠む。（戸井	
2010/12/6	第六：木	木のもとは土とうつろふ朽葉にて夕日に残るもみぢ葉の色	木の下には、土に成り変わってゆく朽葉が落ちていて、紅葉の色を残すかと見えるは、朽葉ではなく、それらを照らす夕日のほうであった。私の身の最期の寄せ所もまた、木の下の土なのであった。	◇参照 「わび人のわきて立ち寄る木のもとは頼む蔭なくもみぢ散りけり」（『古今』）		
2010/12/6	第六：鳥	羽あれば我が身に似たる浮寝鳥濡れても川を立つぞともしき	水に浮きながら寝る鳥は、涙に濡れて寝る私に似ているけれど、羽があるゆえ、濡れても川を飛び立つことができるのが、うらやましいかぎりです。			